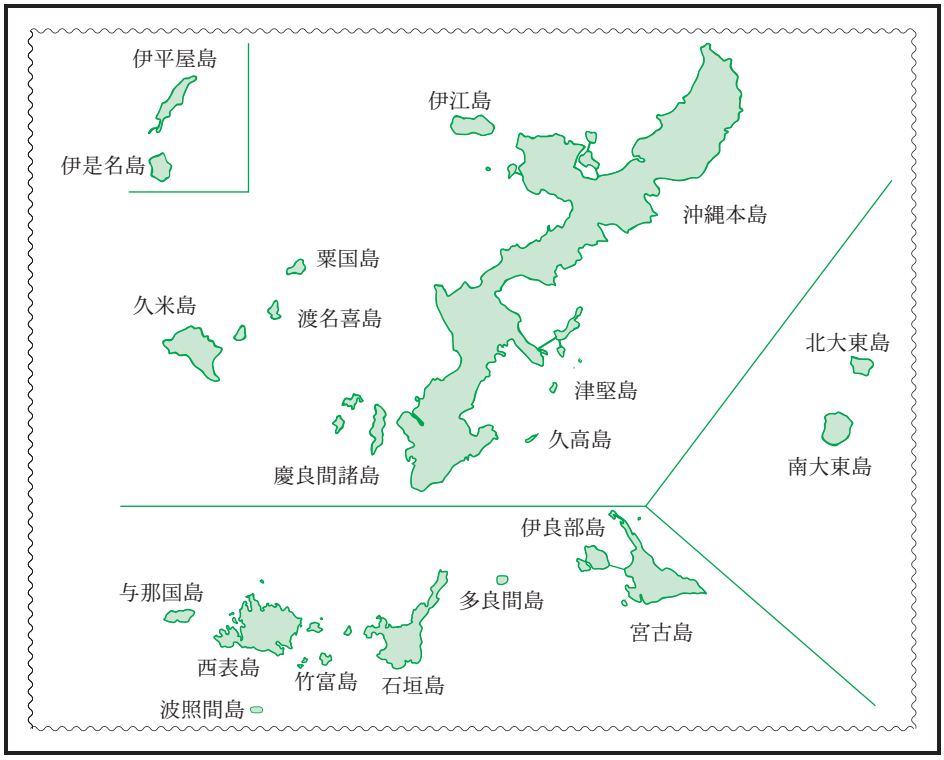
沖縄県小学校長会
沖縄県中学校長会

第 84 号

会　　報



もくじ

1．沖縄県小・中学校長会　代表会長あいさつ
今この瞬間が未来の結果に繋がっている
沖縄県小学校長会　会長
那覇市立銘苅小学校　校長　宮　國　義　人 …… 1

2．新任校長としての抱負
⑴ 創造性にあふれ　心豊かでたくましく生きる
児童の育成をめざして
宮古島市立下地小学校　校長　下　地　美和子 …… 2

⑵「職員一人ひとりの幸せ」を理念に
ワークライフバランスの充実した職場環境づくり
～最上位目標「自ら考え、判断し、
言動できる人の育成」を目指して～
竹富町立船浦中学校　校長　宮　良　　健 …… 4

3．特色ある学校づくり
⑴「すべての子どもの学びを保障する学校」づくり
名護市立大宮小学校　校長　比　嘉　　悟 …… 6

⑵ うまり島にほこりをもって
中城村立中城中学校　校長　鹿　川　義　晃 …… 8

4．校長講話
⑴ 子ども主体の学校を目指して
～学校教育目標を子ども達の身近に～
那覇市立小禄小学校　校長　糸　満　　裕 …… 10

⑵ 校長講話にまつわる私の記憶
糸満市立高嶺中学校　校長　親　泊　正　幸 …… 12

沖縄県小・中学校長会　代表会長あいさつ

今この瞬間が未来の結果に繋がっている

沖縄県小学校長会　会長
那覇市立銘苅小学校　校長　宮　國　義　人

一　はじめに

県小学校長会第二十八代会長として、昨年度に引き続き、会長を務めます宮國義人と申します。本年度は小・中学校長会の代表会長という重責も担っており、一層気を引き締め、本県教育の更なる充実のために全力を投じます。何卒宜しくお願い致します。

さて本会は、関係各位のご尽力により昭和三十六年に発足し、今日までの長きにわたり、本県教育の充実のため、日々の実践を通して各学校の課題を改善したり、教職員の処遇や教育環境などの諸条件について、県教委をはじめ関係機関と連携してその改善に努めて参りました。今を託された私たち現職の校長には、このような歴史的な歩みも踏まえて、現在、そして未来のために、玉石混淆の情報の中から、よりよい情報を選択し、より効果的な実践を推進し着実に成果に繋げることで、私たちの後を継ぐ校長に確実に繋ぐことが強く求められています。

そのようなことを踏まえると、昨今、最大の課題となっている教員未配置問題をはじめ、教職員が働き易い環境の整備や教員の処遇に係る課題改善、それに伴う教員のなり手不足問題の解消など、ここ数年が、教育全体の流れを左右する分岐点になるのではないかと考えています。課題山積の状況故に、それらの一つ一つを全会員の結束力でよりよい方向に推し進め、未来の好ましい結果に繋げましょう。

二　学校経営

加速度の違いこそあれ、教育は常に時代の要請に応えるために変化し続けなければなりません。コロナが落ち着いた今、学校経営をコロナ禍以前に戻すという考えではなく、ここから新たなスタートを切るというワクワク感を持って臨むことが、よりよい経営を創造する力になると思います。

そして我々校長が見るべきものは、目の前の児童生徒と教職員、更には、未来へ繋がる学校の姿です。それは「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会」を創っていくのが目の前の児童生徒一人一人だからです。そのためには、校長が笑顔で職務を遂行したり、児童生徒一人一人の成長に気付き喜んだり、明るい未来の姿を描き、それを児童生徒や教職員、保護者等と共有したりすることが必要です。それが、教職員や児童生徒を笑顔にする原動力になるはずです。

今後も、コロナ禍のこの三年間で経験し学んだことを生かしつつ、教育活動全体を「虫の目」や「鳥の目」で観たり、「魚の目」で読み取ったりすることで、子どもたちの目が輝き、教職員の心を豊かにし、保護者や地域の皆様から信頼される学校経営を楽しみましょう。これこそが、我々に与えられた夢のある仕事だと考えています。

三　各種の研究大会

本年度は、記念すべき第七十五回全連小東京大会（二三名参加）、第七十五回九小協佐賀大会（二十五名＋七名参加）、第七十四回全日中大分大会（六十二名参加）の全てを参集型で実施することにしています。勿論、県小・中学校長研究大会国頭大会（全会員参加）も四年振りに参集型で実施することにしています。

是非、日頃の自らの実践を振り返りつつ、新たな道標を描く機会にするとともに、全国の仲間との絆を強め、県内の会員同士の結束力を強めたりする機会にしましょう。

四　結びに

本年度は、令和六年八月七日・八日に開催予定の第七十六回九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会の成功に向けて、確固たる礎を築く重要な年度になります。小学校の校長だけでなく県小・中学校長会として全会員が心を一つに諸課題の解決を図りつつ、より効果的な教育実践を追求することが大会の充実に繋がると考えております。

また、来る十一月十六日・十七日には、県小・中学校長研究大会国頭大会を参集型で開催することにしております。国頭地区の皆様には何かとご苦労を掛けますが、久々の対面での開催が一層有意義な大会になるよう何卒宜しくお願いします。

全会員の今後益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、代表会長あいさつとさせて頂きます。共に笑顔を大切に、児童生徒一人一人にスポットライトを当てた学校経営を楽しみましょう。

新任校長としての抱負

創造性にあふれ　心豊かでたくましく生きる　児童の育成をめざして

宮古島市立下地小学校　校長　下　地　美和子

一　はじめに

本校は、一八八六年（明治十九年）十一月に与那覇部落でかやぶき校舎に二名の教師と四十名の児童をもって開校し、その後、二度ほど校舎の移転等を経て、明治三十八年に現在地を校地として定めている。二〇〇五年（平成十七年）十月には、下地町・平良市・城辺町・伊良部町・上野村が合併し宮古島市が誕生し市立下地小学校となり、二〇二三年度（令和五年）で百三十七周年を迎える。

白い砂浜が東洋一と言われる与那覇前浜ビーチや、ラムサール条約登録地の与那覇湾を擁する宮古島の南西に位置する本校区は、肥沃な土壌に恵まれ農業の盛んな地域である。しかし近年は専業農家が減少し、兼業農家が増加傾向にあり、また農家の高齢化が進み、その傾向は今後も更に進むものと考えられている。地域人口の定着を図るため団地建設等が行われ、児童数は近年横ばいの傾向にある。校区は広く、与那覇、上地、洲鎌、入江、嘉手苅、高千穂、川満の古くからの七集落と上地団地及び川満団地の二自治会からなる。校区が広いため、三年生以上は自転車免許状交付による自転車通学が認められているが、主な通学路となる国道沿いには製糖工場があり、農繁期には大型ダンプの往来が頻繁である。それゆえ、通学の安全確保のために学校・地域の交通安全に対する意識は高い。

学校周辺には、下地中学校、下地こども園、給食調理場や学童、診療所等があり、便利で恵まれた環境にある。また、保護者も地域の方々も「地元愛」が強く、学校にはとても協力的である。朝の立哨活動では、地域の方が長年ボランティアで続けてくださっている。

児童は、そんな環境に支えられ全体的に明るく伸び伸びとしている。友達関係もよく、誰とでも隔たり無く仲良しで異年齢のつながりも見られ、安全で安心な学校生活を送っている。児童在籍数は、二百三十二名、通常学級十学級、特別支援学級三学級である。

二　学校教育目標と経営方針、目指す資質・能力

㈠　本校の学校教育目標は、

「創造性にあふれ　心豊かで　たくましく生きる児童の育成」である。

㈡　目指す子ども像は、

○「自ら学び考える子」（知）
○「思いやりのある子」（徳）
○「健康でねばり強い子」（体）
○「当たり前の事を一生懸命にやる子」（凡事徹底）である。

㈢　学校の経営方針は以下のとおりである。

児童一人一人の個性を大切にし、社会の変化に対応し、生き抜いていく資質や能力を育成することを目指し、「生きる力」の基礎を育てていく。

①　教育目標が、日々の実践の中で具現化できるように、それぞれの活動のねらいを明らかにして、その達成に努める。

②　教育活動の評価を定期的に行い、目標の実現状況を検証し、改善に努めながら実効性のある教育活動を展開する。

③　教師が教育者としての使命感と誇りを持ち、積極的に学び、協働の精神で取り組む士気の高い学校づくりに努める。

④　清潔で潤いがあり、安心・安全な環境づくりに努める。児童が安心して生活できる環境、夢や目標をもって学習できる環境の中で教育活動の充実を図る。

㈣　目指す資質・能力

急激な時代の変化とともに、Society5.0の時代が目前に迫っている昨今、一人一人の児童が自分の良さや可能性を認識し、他者を価値のある存在として重視し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え豊かな人生を切り拓き、持続可能

下地小学校で目指す9つの力			
自ら学び考える力	○課題に気づく力(低) ○課題を発見する力	○選択する力(低) ○見通す力	○振り返る力
対話的に学ぶ力	○自分の気持ちを伝える力(低) ○考えを説明する力	○自分の考えと比べる力	○相手のよさに気づき伝える力(低) ○他者を理解する力
良い習慣を身につける力	○粘り強くやり抜く力	○自分や相手を認める力	○健康・安全に生きる力

な社会の作り手となるよう、その資質・能力を育成することが求められている。学校では、その資質・能力を育成するための主な舞台が授業や行事等であり、その支えとして、支持的風土のある学級、より良い人間関係、集団づくりが基礎となっている。

本校では、育てたい資質・能力を自ら学び考える子・対話的に学ぶ・良い習慣を身につける力から、九つの力の育成を目指している。これまで付けたい力を明確にした授業づくりを通して、「対話的に学ぶ授業」を目指し、児童も教師もそれぞれが主体となって学びの楽しさを実感できる授業づくりに取り組んできた。また、本校の課題を鑑み「沖縄県学力向上五か年プラン・プロジェクトⅡ」に示す三つの視点「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」を中核に「確かな学力」の育成に取り組んでいる。

三　学校の経営方針の重点事項と主な取り組み

㈠　主体的に取り組むための学級・学校の自治能力の育成

・委員会活動と学級組織の充実を図り、児童一人一人に所属観を持たせるとともに自治的な能力を高め、学び合う学級集団をつくる。

・六年生が委員会を担当し、子ども達が自主的に取り組む環境や、機会を設ける。

取り組みとして、今年、雨になってしまった遠足で、急遽「一年生を迎える会」と抱き合わせて、集会委員が全校児童でゲームや出し物を臨機応変に調整し、全校児童思い出に残る楽しい遠足となった。また、平和集会では、集会委員が中心になり、「全児童で平和のおりづるをしよう」という取り組みを企画し、平和を願う気持ちを強くする良い機会となった。

㈡　児童一人一人の実態を把握し、可能性を引き出せるように、個に応じた教育活動の展開。

・困り感等の把握、ＷＥＢ　ＱＵテストを活用した児童理解とその対応、「安心・所属・承認・自立」の支持的風土のある学級づくり

㈢　校内研修を充実させ、教職員の資質向上と指導力の向上に努める。

・付けたい力を明確にして、「めあてを持ち・学んで・振り返る」授業の継続。

・算数科における「表現して伝え合う『学び合い』」の学習。さらに、学び合う集団づくりとしてコミュニケーション育成のためのＳＳＴに取り組む。

㈣　特別支援教育の組織的推進・充実に努める。

・特別支援学級の教職員でチームを作り、支援が必要な児童についての日常的な報告・連絡・相談を行う。個別支援等、個に応じた合理的配慮について共通確認し、協力学級や保護者とのきめ細かな対応を組織的に図る。また週に一回「特別支援ミーティング」を開き、協働体制で取り組む。

・「校内委員会」を設置し、全教職員の協力につなげ、組織的・計画的な指導支援を行う。

・特別支援の研修会を開いたり、他の研修会に参加したりして他の教職員に伝達する。

㈤　「社会に開かれた教育課程」のもと、地域とつながり、自分たちの地域に愛情と誇りを持つ。地域の発展にも貢献できる人材の育成を目指しキャリア教育の視点を踏まえたふるさと学習にも取り組み、将来、継承・発展させる意欲や態度の育成を目指したい。

・今年度、岐阜県白川町との「海山交流事業」を四年ぶりに実施する。歴史・文化・産業・自然など生活環境の異なる他県の児童と交流し、広い知識と豊かな心を育成し、自主性、協調性、思いやりの心を身につけること等を目的としている。

四　おわりに

本校は、全職員で共通理解の下、チーム下地として取り組んでいる。先生方は子ども達のために努力し、アイデアを出し合い、日々業務に励んでいる。まさに主体的であり、そういう先生方から、私自身、学ぶことも多い。校長として、先生方を信頼し、認め、励まし、そして、共に働けることに感謝しながら、保護者の方々や地域の方々と共に手を取り合って、子ども達のために精一杯尽力していく決意である。

新任校長としての抱負

「職員一人ひとりの幸せ」を理念に ワークライフバランスの充実した職場環境づくり

～最上位目標「自ら考え、判断し、言動できる人の育成」を目指して～

竹富町立船浦中学校　校長　宮　良　　健

一　はじめに

本校は、船浦湾を見下ろす台地にあり、西表島西部地区の玄関口に当たります。前方には船浦湾やテドウの山並み、後方には、鳩間島が眺望できる景勝地にあり、高い山々が連なる深い森や稀少動植物が生息する自然豊かな環境にあります。

校区は、船浦、上原、中野、住吉、浦内の五集落からなり、戦前からの集落に加えて戦後八重山郡島、沖縄本島、宮古島、他府県からの入植者、移住者によってできた比較的新しい地域です。

校区住民の職業は、農業、漁業、畜産業、観光サービス業、土建業、民宿経営、飲食店経営、公務員等多岐にわたり、学校への関心・期待は大きいです。また、保護者や地域の理解・協力のもと実施している学校行事を通した教育環境は、子ども達に様々な経験の機会を与え、文武両面で活躍する頼もしい生徒集団を育んでいます。

本校ではＰＴＡ会員の他に、地域住民にも協力を依頼して、賛助会として会員を募っており、学校・保護者・地域の三者が一体となって学校運営に携わっています。まさに地域を巻き込み、「地域の子は地域で育てる」という態勢のもと、教育活動が進められております。

二　学校経営方針

子どもは地域の宝であることから、校内においても「子どもファースト」は当然であり、保護者や地域の願いに応える必要があります。

また、公立の学校である以上、納税者に対する説明責任を果たすとともに、国・県・町の方針に従うことになります。

そのためには、何よりも職員一人ひとりが仕事へのプライドを持ち、やりがいを感じることが大切です。実際に学校を動かすのは教職員をはじめ、学校司書、支援員、用務員、ＡＬＴ、ＳＣ等を含めた船浦中学校の職員であり、ここにいる全ての職員が幸せを感じて働くことが大切です。

当然のことですが、周りの事をあまり考えず、自らの幸せだけを求めても、結局はうまくいかず、十分な成果も発揮できません。また、どんなことでも一人で完璧にでき、全ての子どもや保護者から強い信頼を得ている個人もいないと思います。だからこそ仕事はチームで行うものです。

しかし、二人以上の人間が集まれば、必ず対立やジレンマが生じます。そこで、学年や教科部会、分掌事務等のチームをうまく機能させるためには、明確で検証ができる目標を設定し、役割分担をしたうえで、コミュニケーションを図りながら共通理解を得ることが大切です。同僚一人ひとり

2023/04/04　竹富町立船浦中学校　校長　宮良　健

2023年度 竹富町立 船浦中学校　学校経営方針 ～成長する個人・組織～

1　理念

職員一人ひとりの幸せ

～ ワーク・ライフ・バランスの充実～

職員の幸せが、子どもの幸せとなり、保護者、地域の幸せにつながる。

2　めざす子どもの姿（＝最上位目標 ）

「自ら考え、判断し、言動できる人」の育成

～　自分らしく　あなたらしく　～

3　信条

「子どもの成長」を信じる

人間は期待された通りの成果を出す傾向がある。（ピグマリオン効果）

「子どもは皆、きっと立派な大人になる」と信じる。

4　行動指針　先ずは私たち大人が手本を示していきましょう♪

(1)みとめ合います
↳【自己存在感の感受】

(2)みんなとします
↳【共感的な人間関係の育成】

(3)自分がします
↳【自己決定の場の提供】

(4)互いを尊重します
↳【安心・安全な風土の醸成】

5　キーワード

○成長（アップデート）　○学年を超えたチーム　○価値語（ことば）

の個性を尊重しつつ、共に相手を理解しながら業務を遂行できるチームづくりが重要だと思います。

そのためには、先程も述べましたが「コミュニケーション」がとても重要となります。自分の「常識」は、年齢や地域、これまでの経験から生まれたもので、それらを共有するためには、正規の会議だけでなく、短時間でも立ち話しで意見を交わし、「正解」が無くても「納得解」「最適解」を導き出すことが大切です。そのようなチームの教師集団と触れ合える子どもは幸せになれると確信しております。

子ども達が安心して自分の意見や考えを出し（自己開示）、毎日、先生や友達からたくさんほめられ（認められ）、信頼され、任せられ、さらに悩み事を相談でき、夢に向かって共に頑張ろうとする意欲が湧けば、学力や体力等でも自然とよい結果が出て、保護者や地域に対する説明責任も果たすことが出来ます。

三　めざす子どもの姿（＝最上位目標）

「自ら考え、判断し、言動できる子ども」ではなく、「人」としているのは、一人の人間として関わりを持つという意味が込められております。

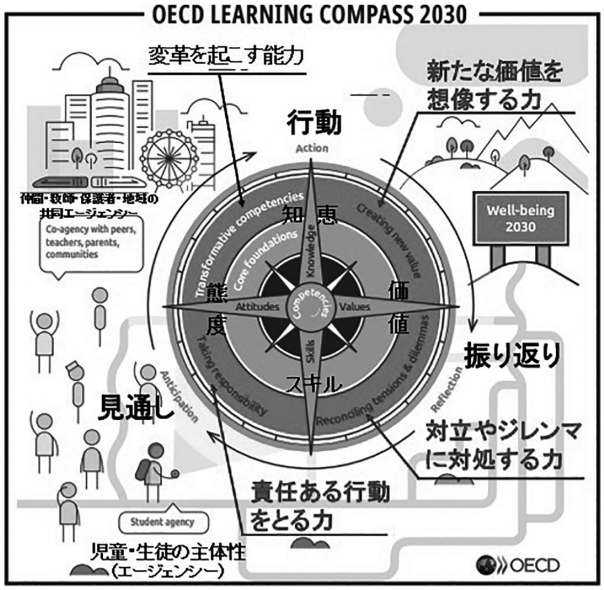
また、今は理解してもらえないかもしれませんが、高校生、大学生、社会人、親になるといった人格を形成する中で「小・中学校の先生が熱心に（厳しく）指導してくれたこと」が理解されることがあるからです。時には厳しい指導も必要ですが、子どもの良さ（価値）を見つけてほめることが最も大切だと思います。

「そんなの当たり前のことだから子どもはほめない。でも、できないことは注意する・怒る。」より「あの先生は、ちょっとしたことでもほめてくれる。自分のことをしっかり見てくれているんだ。」「悪いことだけでなく、良いことも見てくれている。」と子どもに感じさせることで、厳しい指導もできると思います。

サブタイトルに「自分らしく　あなたらしく」としているのは「その人なりの個性や多様性を互いに尊重していこう」という意味を込めました。

また、「自ら考え、判断し、言動できる人」としたのは、OECD（経済協力開発機構）が提示した「Learning compass2030」も根拠の1つです。

個人や社会の幸せ（ウェルビーング）を獲得するためには、「責任ある行動をとる力」「対立やジレンマに対処する力」「新たな価値を想像する力」を「見通し・行動・振り返り」のサイクルを通して、知恵・価値・スキル・態度と関連させながらエージェンシー（主体性・当事者意識）を身に付ける必要性を述べています。



本校においても生徒・職員のエージェンシーが発揮できる取り組みを推進します。

四　おわりに

持続可能な社会を創るためにも、先ずは身近な学校生活の中において、互いの個性や多様性を認め合うことを大切にし、安心・安全に学校生活が送れるような風土をみんなで創り上げていければと考えております。

また、人は期待された通りの成果を出す傾向があるという「ピグマリオン効果」についても全職員で確認し、入学式やＰＴＡ総会の中で保護者にもその旨を伝え理解を得ております。「どの生徒もきっと素敵な人になる」ことを信じ「自分らしく、あなたらしく」という言葉も大切にしていきます。

職員一人ひとりの幸せが、子どもの幸せにつながり、そして、保護者、地域の幸せにつながるよう、教職員がエージェンシー（主体性）を発揮し、働きやすい職場環境づくりを推進しながら、ワークライフバランスの充実を図り、本校をさらに「魅力ある学校」にしていく所存です。

特色ある学校づくり

「すべての子どもの学びを保障する学校」づくり

名護市立大宮小学校　校長　比嘉　悟

一　はじめに

本校は、名護市街を見渡せる高台、双葉が丘に位置し、東に名護岳、西に嘉津宇岳、そして眼下に広がる名護湾、はるか前方に恩納岳を望む風光明媚な場所にある。校区は、広大な市街地が広がり、近年の人口増に伴い、児童数も増えてきている。本年度は創立六三年目を迎え、全校児童八七七名を要する沖縄本島北部一の大規模校である。

児童の実態としては、素直で人なつっこい子が多く、学校行事等では生き生きと参加する児童がほとんどである。授業においても友だちとつながりながら積極的に学び、学習規律の面でも良好な姿が見られる。一方で、学力やコミュニケーションの面で、不安定な児童が一定数おり、特に学びに向かう力などの資質能力の育成を図っていくことが課題となっている。

二　前校長の想いとコロナ禍の苦悩

昨年度、本校に赴任した私は、教育計画に示された「大宮小学校の基本理念『すべての子どもの学びを保障する学校』」を目にし、前校長の想いをしっかりと引き継ごうと決意した。

しかし、赴任当初の学校・授業の様子は、座席を離し、ほぼ教師が中心となって進める一斉授業一辺倒であった。いわゆる新型コロナ感染予防対策の一環としての授業スタイルがすべての教室で行われていたのである。新学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」の実現を提唱したのとほぼ同時に、全世界的に蔓延したコロナウイルスの状況が、子どもたちの学びの保障をないがしろにした現実でもあった。それはこの間、すべての学校・教師が苦悩した時期でもあった。

三　授業研究会を中心とした学校づくり

「すべての子どもの学びを保障する学校」とはどのような学校でどのような授業を構想するのか、職員と話し合い、共有することが急務であった。しかしながら、コロナ禍の中、学級・学校閉鎖が連続する中で、先生方は「そんなこと言ってられない」状況に追い込まれており、課せられた教育課程の遂行に専念せざるを得ない状況となっていた。そこで、校長のトップダウンで学校経営方針の中に次のような内容を織り込んだ。

① コロナ感染予防対策をしつつ、先生方自身が「やりたい授業」を行うこと。

② 校内研修を授業研究会とリフレクションを主とした内容で実施すること。

③ 授業を公開し合い、授業でつながる職場となること。

④ 学校のすべての教育活動が学校の基本理念に結びつくよう構想・実践すること。

特に授業研究会は、「子どもの学びをみとる」トレーニングの場として構想し、学校づくりの中心に位置づけ実施した。年一三回の授業研究会（内四回は外部講師招聘）は、参観者が児童一人ひとりの学びをみとり、学びの契機（学習課題・学習形態・学習材の工夫等）について語り合う場として位置づけた。その際、全職員が発言することにより、授業を通して学び合う同僚性・協働性の構築を目指すものでもあった。

四　プロジェクトチームの機能化

前校長が構想したボトムアップ型（学校経営参画型）を目指したプロジェクトチームの機能も本校の特色ある学校づくりの一つである。

全職員が「授業づくり」「インクルーシブ教育」「ＣＳ・キャリア教育」「ＧＩＧＡ・ＩＣＴ」プロジェクトチームに属し、それぞれのチームから教育活動の充実に向け提案・検証・改善を発信し、学校運営に寄与している。

その際、それぞれのチームの目標を学校基本理念である「すべての子どもの学びを保障する学校」に向かって構想し実践することを共通理解して進めている。

学校経営の基本理念
「すべての子どもの学びを保障する学校」の実現に迫るアプローチ

- 授業づくり：子どもの学びをみとる力をつけ、教科の本質に迫る学習課題や支え合う関係を保障する授業づくり
- インクルーシブ教育：友だちに支えられながら、多様な子どもが多様に学び成長する教育環境づくり
- ＣＳ・キャリア教育：保護者や地域の「もの・こと・ひと」を生かした探究的な学びへの挑戦、大宮中と連携した教育活動
- ＧＩＧＡ・ＩＣＴ：ＩＣＴを活用した共有と多様な学びをサポートする教育活動

五　実践事例

①「主体的・対話的で深い学び」の追求

昨年度当初の全教室で見られた一斉授業から、ペアや小グループを活用した授業風景が日常となり、先生方自身のそれぞれのスタイルでの授業づくりが進められている。一方、探究的学びや授業を通して身につけさせたい資質能力の育成に課題があり、授業研究会を通した学びを継続している。

②　インクルーシブ教育の展開

今年度、特別支援学級（知的三学級、情緒六、難聴一、病弱一）が三学級増設された。このことは、一人ひとりの発達課題や困り感を全校体制で丁寧にみとることができた、といえる。一方、インクルーシブ教育の視点からみると、交流学級と支援学級の分離状態が拡大したともいえる。そういう共通認識のもと、学級間の交流、交流学級における発達を支える配慮・支援を強化していくことが確認された。支援の必要な子どもたちの発達は、他者との交流の中で発達を保障する必要があり、また交流学級の児童にとっても大きな学びになるという共通認識である。

③　ＣＳ・キャリア教育の展望

昨年度より、大宮中・大宮小校区運営協議会が発足し、コミュニティ・スクールが本格的に始動した。その中で、読み聞かせサークル、保護者有志による「子育て交流会」の定例化、漢検の取組、授業への保護者・地域関係者の参加等が活発に行われている。「皆で子育て」を合い言葉に、学校・家庭・地域が連携・協働してより豊かな教育環境を実現していきたい。

④　ＩＣＴ活用の日常化

ＩＣＴ活用は、「まず使わせる」段階から、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための活用に移行しつつある。特に特別支援学級の活用場面で、子どもの特性に応じて「タイピング入力」「音声入力」「ペン入力」を選択して行う実践や社会科等における資料収集など、学びを支える活用法が定着しつつある。

六　おわりに

学校キャッチフレーズ「みんなで学び、笑顔あふれ、安心して過ごせる学校づくり」を児童・教職員・保護者・地域関係者と共有し、豊かな教育環境づくりに努めていきたい。

特色ある学校づくり

うまり島にほこりをもって

中城村立中城中学校　校長　鹿　川　義　晃

一　はじめに

中城村は沖縄本島の中部に位置し、宜野湾市、北中城村、西原町に隣接している。村の歴史は古く、北中城村の荻道貝塚から出土した遺物の研究によると、三千五百年以上の歴史を有すると推定されている。村内には二〇〇〇年十二月に世界遺産に登録された「中城城跡」があり、かつての城主で琉球王国時代において築城の名手といわれた人物「護佐丸」をモチーフにしたキャラクターが村内数多くの場所で活用され、多くの地域の方々に親しまれている。

本校は、中城村の海岸平坦部にあって波静かな中城湾に面した「吉の浦」と呼称する肥沃で広大な土地がひろがる中城村字屋宜に所在する創立七十六年目の学校で、生徒数は五百四十三名（令和五年五月一日現在）の中規模校である。

近年、学業面では保護者・地域の協力のもと、かなりの伸びを示すようになってきた。また、体育・文化系の多くの部活動が地区大会で上位に入賞する生徒が増え、地域の伝統芸能活動においても優れた活躍をする生徒もいる。

今年度より沖縄県教育委員会から「道徳教育の抜本的改善・充実に係る事業」の研究委託を受けて、二年間の道徳教育に関する校内研修を計画・実践しているところである。

二　学校経営

本校は令和三年度から「夢と志を持って主体的に学び、心豊かで心身たくましく生き抜く生徒の育成」を学校教育目標として、村教育長が常日頃から述べている「確かな学力の育成など知徳体バランスのとれた生徒を育成」するため、今年度は次の重点目標を掲げている。

○しっかり教えじっくり考えさせてみて、出来たことを価値づけることにより自己肯定感・自己有用感を高める。

○授業と補習、家庭学習、定期テスト・単元テストを連環させ「確かな学力」の育成と自己調整力の育成をめざす。

○道徳の授業で生命尊重の意識を高め、生徒指導等で危険回避能力を育む。

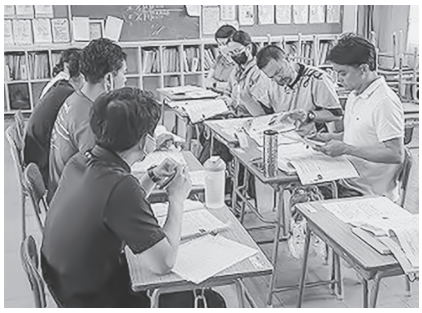
○規範意識を高め自制心を育み、いじめが発生しにくい人間関係の構築をめざす。

このあと、具体的な取組について紹介していく。

三　具体的な取組

（一）道徳教育に関する校内研修

本校では今年度から二年間、道徳教育の抜本的改善・充実をめざした道徳科の授業づくりや教育課程全体をとおした道徳教育の充実に向けて、テーマを「よりよく生きるために自己を見つめ、多面的・多角的な考えをもつ生徒の育成」とした校内研修をすすめている。これまでも道徳研究校の研究発表や関連講演へ参加した教師を中心に事例を共有し実践につなげてきたが、全教師で理論から学び、道徳科の授業実践、学校における教育活動全体に道徳教育の視点をもって取り組む体制を構築していく。現時点では、年度当初に基礎理論を学び、授業づくりのため各学年単位で毎週行う道徳会の実施、県外研究校への職員派遣などをすすめている。取組の一例として、道徳科の授業終了後に、授業者が本時の指導観や成果と課題などの振り返りを行い、次時に生かせるようにしている。本校生徒が苦手とする「自分の考えを他者と交流させ議論する」ことが道徳科の授業で実践できるよう全教師で研修を積み重ねていきたい。



（二）自己調整力の育成

義務教育課「自学自習ガイド」によると週の目標を設定して毎日の学習を振り返る振り返りシートの活用や自己調整力や自己管理力を育むダイアリーの活用などが掲載されている。本校でも生徒の授業と連動した宿題を提示したり、自主的な家庭学習を行ってそれを振り返りシートにまとめるなどしてきた。しかし、従来の取組では前週に行った家庭学習時間を記録して集計するのみにとどまっていた。今年度は、生徒が学校行事や部活動等の予定をふまえて先を見通した自主的・計画的な家庭学習となるよう、また、自分自身の学習状況をふまえて家庭学習に取り組むなどの自己調整力を育むことをねらいとした。そこで市販のダイアリー（ウィークリータイプ）を活用し、毎日の「家庭学習の内容と学習した時間」、家庭学習から「分かったこと」「次にやること」などの振り返りの記入を基本とし、学校行事等は毎週末に学級役員が学年掲示板から書き写してきた内容を学級で共有してダイアリーに記録させている。移動教室の際もダイアリーを持参し、教科担任から告げられる宿題や提出物の〆切日なども各自で記録させている。いわゆる「デコる」ことも華美にならぬ程度に認め、愛着のある一冊となるよう助言している。また、継続していくためには校長講話等で導入のねらいなどを度々伝えていく。

（三）生徒会と連動した学級班活動

沖縄県教育委員会「魅力ある学校づくりパンフレット」によると、自治意識の醸成をめざして生徒が中心となった自治的活動の推進が例示されている。本校では、各学級の生徒会組織図等の掲示物をそろえるとともに、生徒会各種委員会からの伝達事項等の確認と活動の場として「学級班活動」の時間を毎月一回設定している。当日の朝の会終了後、各委員会から指示のあった活動や話し合いをすることにより、生徒会や学級への所属意識が高まり自己有用感等が育まれている。一例として生活委員会による身なり点検や教室整備、保健委員会によるポスター制作など、活動も充実してきた。あわせて、生徒会役員は近隣町村の生徒会と交流（中学生フォーラム）を持ち、互いの活動内容について情報共有を行っている。ちなみに、本校生徒会の各専門委員会が取り組むＳＤＧｓ十七の目標を意識した活動は、他校からも高い評価をいただいた。

（四）時程表の見直し

教師が教育相談をしたり教材研究を行うための放課後の時間を少しでも多く確保したいとの思いで、今年度から一校時の開始を八時三十五分開始とした。中頭教育事務所「令和五年度学校における働き方改革取組計画」によると各学校の実態に応じた週時程の再考として八三〇日課を推奨をしているが、本校では不登校になる前の早期に生徒の表情から情報をキャッチしたいとの教師の意見も参考にして八三五日課とした。ただし、毎週水曜日は朝の活動が行える時間を二十五分間確保した。その時間帯を活用して全体朝会等や保護者等による朝の読み聞かせを設定している。その日はキープクリーンデーとして教室内外の保清を生徒に意識させて、給食後の清掃を無しとしている。そのため、毎日の帰りの会終了が午後三時五十五分終了とそろい、完全下校時間を繰り上げた。

四　おわりに

六月に策定された次期教育振興基本計画に関する文部科学省の解説動画では、変動、不確実、複雑、曖昧などのキーワードで表現される将来の予測が困難な時代において「学校教育を船に例えたとき、そのような予測困難な時代（海）を航海をする上で羅針盤となるのがこの基本計画である」とのことであった。羅針盤が発明される以前の航海はにぬふぁ星（北極星）を頼りにしたことから、かつて、沖縄県教育委員会は学力向上主要政策「夢・にぬふぁ星プラン」策定し、確かな学力などの生きる力を育むことをめざしてきた。その時々で用いられる新たな施策・教育用語などは異なれど、学校教育の拠り所としての教育施策などを校長として、先生方へいかに浸透させていくかを念頭に、今後も特色ある学校づくりに邁進したい。

最後に、中城城跡が世界遺産登録されたことを記念して設置された石碑には、「うまり島にほこりをもって」と刻まれている。校長講話ではこの碑文をよく引用し、「本村に生まれ育ったことを誇りにして育ち、将来、本村に貢献できる人材となることを願う」と語る。

多様な他者と協働して課題を解決することができる資質・能力をもった生徒の育成に向け、各種取組が効果を発揮できるようマネジメントしたい。

校長講話

子ども主体の学校を目指して
～学校教育目標を子ども達の身近に～

那覇市立小禄小学校　校長　糸　満　　裕

一　はじめに

小禄小学校は、昭和二十二年に高良初等小学校から分離し、現在の那覇市の南、奥武山公園近くの北小禄森口原に創設されて令和五年度で七十七年目を迎えます。創設当時は保護者・地域の方総出で茅葺きで校舎を建築したと記念誌に伝えられています。児童数は現在三五七名で各学年二クラス、特別支援学級四クラスの合計十六クラスです。那覇市内では比較的小規模の学校です。地域には大型ショッピングモールがあり、また平成十五年にはモノレールが開通したことで生活するにはかなり恵まれた環境にあります。

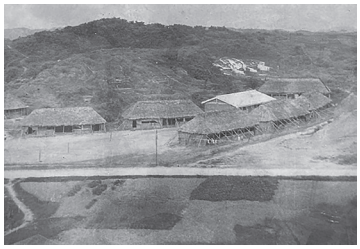


写真１：創設当時の茅葺き校舎

写真２：現在の校舎（玄関）

二　校長講話について

私は「校長講話」は学校教育目標の特に「めざす児童像」と「めざす学校像」の実現に向けての活動と捉えています。学校教育目標は子どもにとって、ややもすると「ただ黒板の上に掲げられているもの」と捉えられがちですが、もっと子どもの近くにあり、子ども達も主体となって学校を運営していくような目標であってほしいと願っています。そこで、始業式や修了式を含む全十二回の校長講話はできるだけ**学校教育目標に関係する内容**を話すようにしています。

校長講話の時間は基本的に毎月一回、十五分程度ですが、体育館への移動も含めると実際は十分程度です。そこで、**できるだけ短く**、一年生から六年生の子ども達にもわかりやすく伝わるように、**抑揚をつけゆっくり話し**、毎回写真やイラストを多用した**プレゼンテーションソフトを活用**しています。

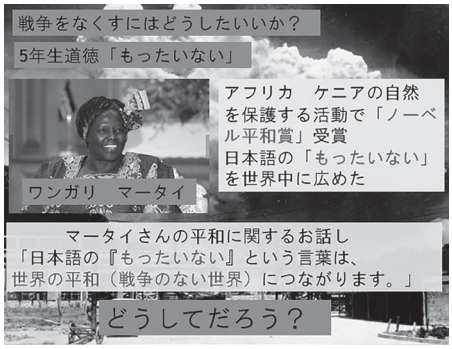


図１：令和５年度５月の講話のプレゼン

三　校長講話の年間計画

次の表は令和五年度の「校長講話年間計画」です。「学校教育目標」に直接関わらない講話は「学校行事」「美化や給食、人権等の年間計画」を参考に話題を考えています。特に四月は学校教育目標を低学年にもわかりやすいように話し「みんなで力を合わせて目標を達成しよう」と呼びかけます。七月は「一学期前半の目標の達成状

表１：令和５年度校長講話年間計画

回	月	題	内　容	備　考
①	**4**	**学校教育目標**	**小禄小の学校教育目標は？**	始業式
2	5	戦争と平和	戦争をなくにはⅠ	平和旬間
③	**7**	**学校評価**	**小禄小のいいところ？**	
④	**7**	**体力テスト**	**おろくっこの体力は？**	１学期前半終了
5	8	読書月間	作者の伝えたいことは？	１学期後半開始
⑥	**10**	**いじめ・平和**	**いじめ・戦争をなくすにはⅡ**	終業式
7	10	運動会	運動会なぜなぜクイズ？	始業式
8	12	掃除	掃除をすると･･･	２学期前半終了
9	12	給食週間	どこの国の料理？	２学期後半開始
⑩	**1**	**学校評価**	**６月とどう変わったかな？**	
⑪	**3**	**キャリア教育**	**どんな仕事につきたい？**	
12	3	一年間を振り返って		修了式

○は学校教育目標との関連が深い内容

況」について共有します。一月は「年間の目標の達成状況」を共有し「次年度の課題」を示します。

四　校長講話の実際

（一）四月「学校教育目標」について

本校の掲げる学校教育目標は「よく考える子」「心豊かな子」「たくましい子」です。どの学校も同じだと思いますが、かなり抽象的な文言だと思います。私は次の二つの目的で目標を具体化しました。一つは**「子ども達に目標をわかりやすく伝えるため」**二つ目は**「評価をするため」**です。具体化の文言は沖縄県の「児童質問紙調査」の項目を活用しました。ご存じのように県の「児童質問紙調査」は基本的に六月と十二月の年二回です。ですから年間二回は学校教育目標の達成状況を把握することができます。ただし県の調査対象は四年生以上であり、全学年の実態を把握するために、本校独自で文言を易しくして一年生から三年生用も作成し調査を実施しています。

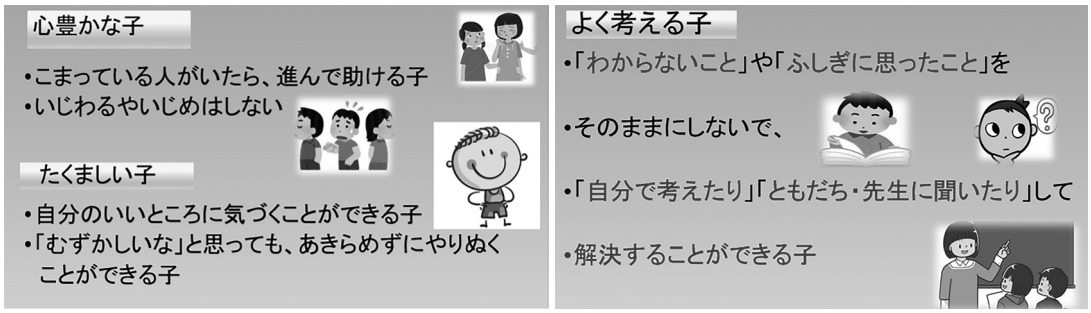


図２・３：学校教育目標と児童質問紙の関連

（二）「学校教育目標の評価」について

令和四年度二月の校長講話では、「学校教育目標の評価」に加えて那覇市教育委員会の「生活基本調査の結果」についても話しました。講話では評価結果に加えて校長としての願いも付け加えて、みんなも先生達と一緒に力を合わせて「よりよい小禄小学校にしましょう」と話し、学校運営への参画を求めました。学校評価の結果は事前に職員会議や終礼で職員にも周知しています。評価の結果を踏まえて次年度の学校経営案を作成します。

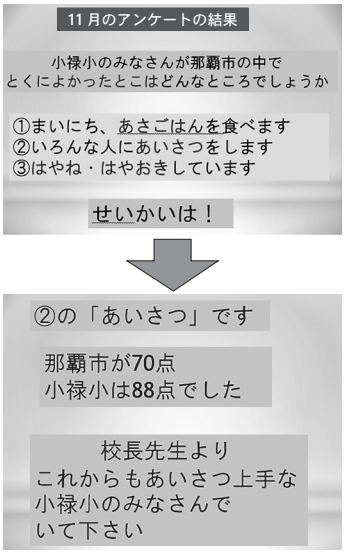


図４・５：生活基本調査結果

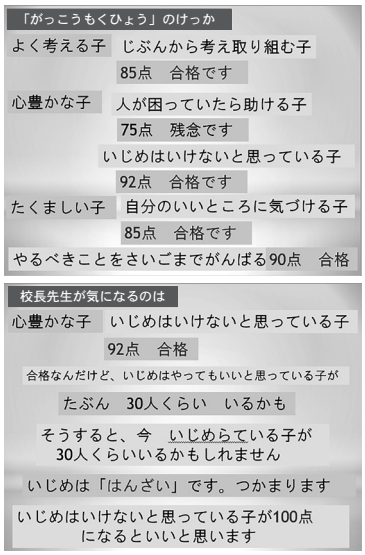
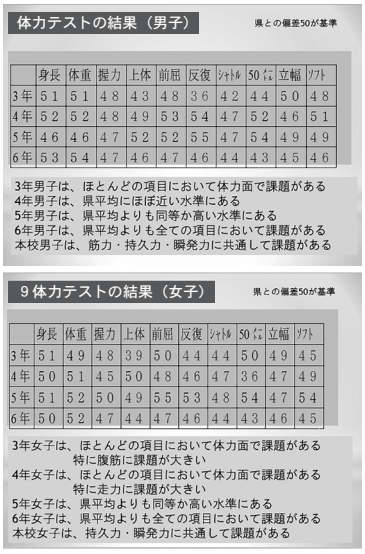


図６・７：学校目標の評価

（三）「おろくっ子の体力は」について

令和四年度七月の校長講話では「おろくっ子の体力」をテーマとして、五月に実施した体力テストについて話しました。体力テストの結果より、本校の子ども達の体力は沖縄県の平均より下回っていることがわかりました。この講話では子ども達よりも職員に響いたようで、令和五年度の本校の校内研究は、職員のほぼ全員が「体育」を選択し、現在研究に取り組んでいる所です。



体力テストの結果（男子）　県との偏差50が基準

	身長	体重	握力	上体	前屈	反復	ｼｬﾄﾙ	50ﾒｰﾄﾙ	立幅	ｿﾌﾄ
3年	51	51	48	43	48	36	42	44	50	48
4年	52	52	48	49	53	54	47	52	46	51
5年	46	46	47	52	52	55	47	54	49	49
6年	53	54	47	46	47	46	44	43	45	46

3年男子は、ほとんどの項目において体力面で課題がある
4年男子は、県平均にほぼ近い水準にある
5年男子は、県平均よりも同等か高い水準にある
6年男子は、県平均よりも全ての項目において課題がある
本校男子は、筋力・持久力・瞬発力に共通して課題がある

９体力テストの結果（女子）　県との偏差50が基準

	身長	体重	握力	上体	前屈	反復	ｼｬﾄﾙ	50ﾒｰﾄﾙ	立幅	ｿﾌﾄ
3年	51	49	48	39	50	44	44	50	49	45
4年	50	51	45	50	48	46	47	36	47	49
5年	51	52	50	49	55	53	48	54	47	54
6年	50	52	47	44	47	46	44	43	46	45

3年女子は、ほとんどの項目において体力面で課題がある
特に腹筋に課題が大きい
4年女子は、ほとんどの項目において体力面で課題がある
特に走力に課題が大きい
5年女子は、県平均よりも同等か高い水準にある
6年女子は、県平均よりも全ての項目において課題がある
本校女子は、持久力・瞬発力に共通して課題がある

図８・９：体力テスト評価

五　終わりに

私は校長として、子ども達にとっても職員にとっても充実した学校生活を過ごしてもらいたいと考えています。そのためにはそれぞれの立場でよりよい学校を作っていくために、学校運営者としての自覚をもってもらい、共にベクトルを共有して取り組んでいくことが大切だと思います。ですから、校長講話では本校の強みや課題を全児童と全職員で共有するよい機会だと捉え、「学校教育目標」に関する話題が中心となります。課題としては幅広い発達段階の子ども達にきちんと伝わっているかですが、特に低学年の先生方には再度かみくだいて話してほしいとお願いしています。

校長講話

校長講話にまつわる私の記憶

糸満市立高嶺中学校　校長　親泊正幸

一　はじめに

東に市内最高地となる与座岳、西に糸満市街、その向こうに海を隔てて慶良間諸島を一望する静かな農耕地区に位置する本校は、有名な南山城跡に隣接する歴史も深い学校である。校区内の五つの字から通学する生徒は全一四五名、通常学級が各学年二学級ずつ、特別支援学級が三学級のこじんまりとした学校である。生徒は転出入を除いて、隣校の高嶺小学校を卒業し同じ仲間で入学。深い絆で結ばれた生徒達である。令和十年度に島尻地区初の小中一貫校としての開校を目指し、今後本格始動の予定である。保護者、地域の協力に併せて学校運営協議会やＰＴＡの支援を受けながら生徒の育成に努めている。

二　校長講話について

校長を務めた初年度、校長講話にあたりそのテーマ設定や題材選びにまず戸惑った。どうしたものかと試案する中、ふと思いついたことは「校長講話」に関する書籍にヒントやアイディアを求めること。大きな書店でその類の本を買い求め、ページをめくった。しっくりこない。すぐに本から気持ちが離れ、さて、と考え導き出した自分の理屈は「学校経営方針には『目指す生徒像』が掲げられている。そのものずばりではなくても『重点目標』などを見ればこんな生徒になってほしいとの学校や先生方の願いがある。そのことを伝えたり、一緒に考えたるする場にしよう。」だった。事実なので書いたが、とても恥かしい思い出である。こうして私の「校長講話」がスタートした。

三　コロナ禍での実施

校長職に就いた令和二年度は、ご存じの通りコロナ禍初年度。当時の勤務校でも始業式、入学式が四十日程度延期となり、新職の不慣れも手伝って不安なスタートとなった事を覚えている。校長講話も全校集会の形態がとれず、猛烈な勢いで学校に導入されたＩＣＴ機器を利用したリモート開催であった。いろいろと考えた結果、プレゼンテーションソフトのスライドショー記録機能を活用した一本の動画づくりに挑戦しようと決めた。ソフトの使い方を調べながら自分が伝えたいことを画像と音声で一つの作品に作り上げていく過程は今までに経験したことのないもの。コロナ禍で加速するＩＣＴに後れを取っている現実を目の当たりにしながらも、嫌いではないので時間はかかったが、どうにか仕上げることができた。校長講話のお役目と、コロナ禍が私をチャレンジに促し、新しいスキルを身につけさせてくれた。

四　反省点

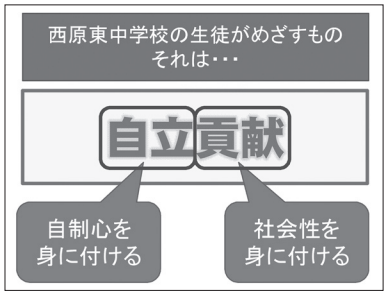
校長講話は当然ながら時間が決まっており、生で講話をするとき、時間内に終わる事を意識し、計時をしながらのリハーサルも校長室で行う。しかし、伝えたいという気持ちが先立つのか、本番の講話では繰返しや言い換えにより、言葉が余分に出てくる。気が付いて時計をみると予想外に時間が経過しており、早口になったり、端折ったりして締まりのない講話になることが数回あった。そんなときの生徒の反応は言わずもがな。

分かっているつもりでできない「短く」「適切な言葉を選んで」「必要最低限の言葉で」「内容を厳選して」「生徒の表情を読み取りながら」「一方通行でない双方向の対話的な」講話がなかなかうまくいかない。今後も改善に努めなければと思っている。

五　これまでの内容

「自立貢献」

前任校のスローガンは「自立貢献」。言葉を掲げても、生徒自身が具体的に何ができるようにするのかという目標ともいうべき行動が分かっていなければ努力のしようがない。こ



の言葉に込められた意味を生徒と共に確認し、「あいさつ」「返事」「あとしまつ」の三つをキーワードとして具体的な行動を示した。赴任時にはすでに設定されていたスローガンであったが、学校経営方針を読み込み、自分なりの解釈を練りこんで理解を深める機会となった。講話を通して指導に当たる先生方にも理解を深めていただけたと思った。校長講話は生徒だけでなく、先生方にも、講師である校長にも理解を深めさせ、実践を後押しする力となるんだと思った。

「何のために勉強するのか」

殆どの子どもたちが抱き、その答えに使われる言葉が人によってちがう疑問。私の教師人生でも幾度となく訊かれた。

「こうすればいいことがある」と実感を伴って納得するとき、人はやってみようと思えて、実行に移しやすいと考え、その実例を講話に組み込んだ。様々なオファーに受験勉強で得たスキルを使って応え、売れるようになったお笑いタレント。学校で学んだ知識やスキルが仕事上の課題解決や、キャリアアップに役立っていると語る職業人等。有名どころで行けば、時代の流れを読み解く社会学ともいえるスキルで全日本地図づくりの大役をつかみ取り、独学で学んだ天文学をもって地球の大きさを算出するという夢を実現した伊能忠敬。などのエピソードを紹介し、勉強が言わば自己実現や夢の実現をもたらしてくれるとまとめた。理屈でなく、実例が生徒には効果的だと実感した。

「本を読むということ・・・」

「朝読書」など図書に親しむ時間を設定していない本校では、読書推進を掲げていてもその取組が弱い。年に数回の読み聞かせや、図書委員の奨励活動、読書旬間の設定に加えて、校長講話で後押しができたらと企画してみた。中学生に読んでもらいたい数ある図書の中で自分なりに選んだ「星の王子さま」をとりあげた。百年も前に発表され、二百以上の国や地域の言葉に翻訳されるほどの価値や魅力がある本と紹介した。本は人類が生み出した貴重な財産なのだと転じて導入。読書は想像力を育て、考え方が広がり、言葉を操る力を与えてくれるなど読書がもたらす〝いいこと〟を確認し合った。取ってつけたような感もあったが、記述形式に移行する県立高校入試の設問にも対応できそうだと紹介した。実益がなければやらないことも人間の性だと思いながら。微力ながら、校長講話で教育活動への加勢ができたかなと思えた。

想像力を育ててくれる。

自分の思いや考えを広げてくれる。

新しいものの見方を教えてくれる	自分とは違う考え方に気づかせてくれる。

言葉を操る力を育ててくれる。

六　嬉しいできごと

校長講話のある回でチャレンジ精神を後押ししたいと思い、私自身の琴線に触れた、勇気をもらえる「偉人、有名人の名言」を紹介した。検定試験、部活動、コンクール、などへのチャレンジを促し、自分を表現し自信や活力を得てもらいたいと、校内でも生徒の活躍の場を多く作ろうと取り組んでいた中で、校長も後押しができればと思ってのこと。校長室前の廊下を行き交う生徒に見てもらいたいと思い、講話で使用したスライドをA3用紙に印刷して貼っておいた。見てくれていた男子生徒が一人、貼りだした数枚に順次見入っている。二人連れの女子生徒は「私はこれが好き」と互いに伝えあっている。「少しは効果がったかな」と嬉しくなった。ある先生からも「校長室前の掲示、あれいいですね」との感想をコメントと共にいただいた。シンプルだけどその分、生徒に伝わりやすかったのかなと自分で分析もした。講話後の生徒の反応が見れると、講師も成長できるのだと再確認した。校長講話も指導と評価の一体化の枠内にある。

七　おわりに

「校長講話」とのお題をいただき、自分の取組を振り返り、あれこれと思い出す中で「記憶」と題して思い出のようなものを綴ってみた。本誌に不適切かなとも思いながら。話はあまり上手ではないが講話もお務めなのでスキルアップを続けたい。伝えたいことは、いくらでも考え付きそうだ、教師として何をすべきかを考えると湧いてくるのかも。とにかく生徒を元気づけ、勇気づけ、彼らがチャレンジしてみようと思えるような講話にしたいことは確かだ。思えば、ネタに困っていた当初は、「いい講話を」と力み、いらぬ意識を持っていたのではないか。講話でねらいたいことは生徒が自らを成長させようとする行動を促すことだと考えている。これから校長講話に取り組む方々にはこのページが参考や、ヒントなれば嬉しい。

勝ち負けなんかちっぽけなこと
大事なのは、本気だったかどうかだ！

松岡修造
元プロテニスプレイヤー

沖縄県小・中学校長会会報第84号

発行者　沖縄県小・中学校長会
住　所　那覇市松尾１－６－１（沖縄県教職員共済会館八汐荘３Ｆ）
電話　098-943-9747　　ＦＡＸ　098-943-9748
E-mail:oki-koutyoukai2@kca.biglobe.ne.jp(事務局長)
oki-koutyoukai1@kpe.biglobe.ne.jp(事務局員)

印　刷　株式会社　国　際　印　刷
電話　098-857-3385　　ＦＡＸ　098-857-3892
E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp